

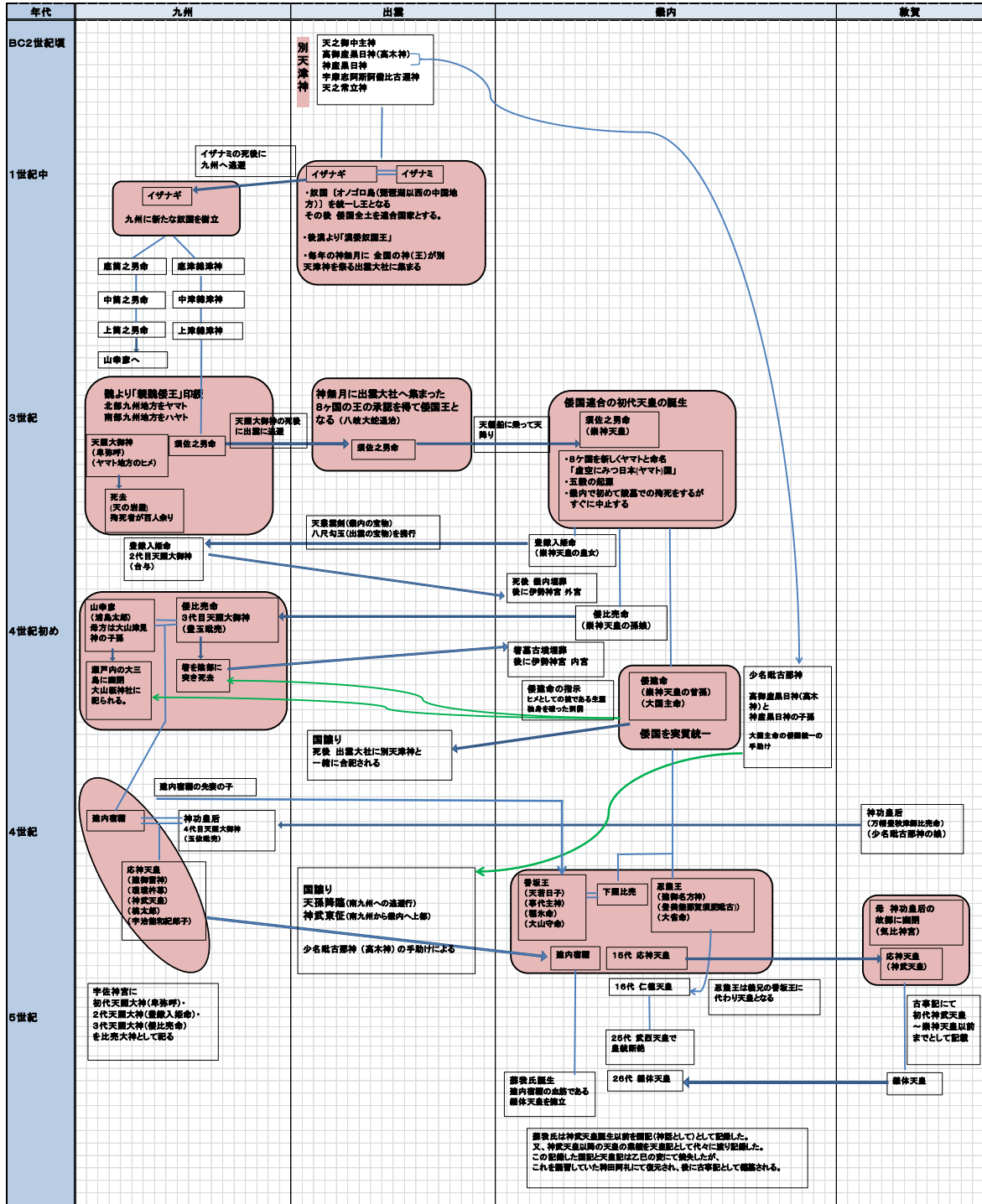
# 日本始まり

桑田昭弘

## はじめに

本論文は、日本の始まりから第26代継体天皇までについて歴史の連続性を考えて著わしている。本論文を分かりやすく理解する為に筆者の考える結論を予め下記の系統図に示す。

図 1.





命は「事代主神・建御名方神」しか後継者はいないと言っている。

又、建御雷神が国譲りを迫った時点で天若日子は高木神の矢にて既に死んでいた。そして、同じように建御雷神が国譲りを迫った時、事代主神は「船を引っくり返し隠れた」との表現で既に死んでいる事を示している。

「天若日子・阿遲志食高日子根神」と「事代主神・建御名方神」は同一の兄弟と考えられる。

## 2) ニギハヤヒについて

古事記によるとニギハヤヒはナガスネヒコの妹であるトミヤヒメを妻としている。そして、神武天皇がナガスネヒコを討った後に天から参上したとなっている。しかし、先代旧事本記によれば神武東征以前に天神として降臨したが復命せず既に亡くなっていたと記してある。神武東征後に神武天皇に降ったのはニギハヤヒの子の宇摩志麻遲命と言われている。

ニギハヤヒはナガスネヒコと義兄弟で神武東征の時には既に亡くなっている。つまりニギハヤヒは天若日子であると予想される。

## 3) 香坂王について

古事記にて、忍熊王の兄である香坂王は応神天皇が大和へ来る前に大きな猪に食われて既に死んでいる。

香坂王も又 天若日子・事代主神・ニギハヤヒと良く似た境遇である。

## 4) 「天孫降臨」、「神武東征」、「応神東征」の共通点

- ① 侵攻する先には敵対する兄弟2人がいる。
- ② 兄は侵攻前に既に死んでいる。
- ③ 弟とは戦い(?)の末に勝利する。
- ④ 侵攻した土地に君臨する。
- ⑤ 神武天皇と応神天皇は、九州から畿内への侵攻の点でも同じである。

(ニニギノミコトの降臨場所が異なる点については後述)

以上のような共通する出来事となっている。

## 5) 「天菩比・天若日子」と「稲氷命・御毛沼命」について

先に下記点を補足する。

須佐之男命はイザナギより海の支配権を託されている。その須佐之男命が築いた国は綿津見の国(海の国)と思われる。

そこで「天菩比神・天若日子」と「稲氷命・御毛沼命」を比較したのが下記である。

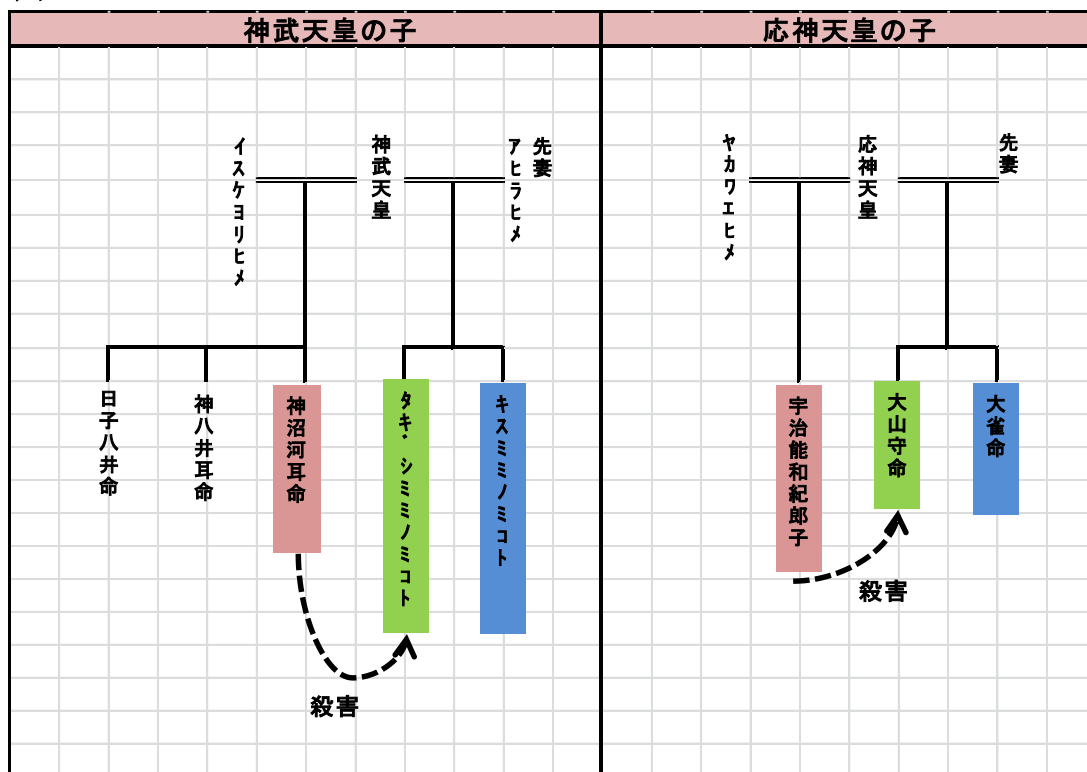
人物	登場場所	どの様になった
天菩比神	天孫降臨 先遣隊 葦原中国 最初の派遣者	大国主神におもねって三年たっても復命しなかった。
稲氷命	神武東征 神武天皇の兄(二男)	母の国である海原に行ってしまう。母の国である海原に行ってしまう。
天若日子	天孫降臨 先遣隊 葦原中国 2番目の派遣者	大国主神の娘を妻とし8年たっても復命しない。 葦原中国を自分のものにしようとした為、高木神の矢に当たって死んだ。
御毛沼命	神武東征 神武天皇の兄(三男)	波の上を踏んで、常世の国に渡った。

天菩比神が稻氷命であり、天若日子が御毛沼命であると思われる。

6) 神武天皇の子と応神天皇の子について

神武天皇の子と応神天皇の子を比較した図が下記である。

図 3.



- ① いずれも先妻に二人の子がいる。
  - ② その二人の子の兄の方が王位を狙い画策をする。
  - ③ 後妻の子が、その兄の方を殺害する。
  - ④ その後、その後妻の子が王位につく（応神天皇の場合はその後に大雀命が王位につく）
- 以上の共通点からも神武天皇と応神天皇は同一人と思われる。

（筆者は、この図の神沼河耳命と宇治能和紀郎子が各々神武天皇と応神天皇自身であるとしているが詳細は後述とする）

7) 建内宿禰と神功皇后（主旨と異なる部分もあるが、後の為了承願う）

図 2 にて応神天皇を建内宿禰と神功皇后の子として記載したが下記補足する。

古事記によると応神天皇は、仲哀天皇（倭建命の子）と神功皇后の子となっている。その出生の流れは下記である。

- ① 仲哀天皇と神功皇后は熊曾征伐に九州へ行く
- ② 神功皇后が神懸かりにて西へ行くように神託を告げる
- ③ 仲哀天皇は神託を聞かない
- ④ 仲哀天皇は突然に死ぬ
- ⑤ 建内宿禰が神託を下した神の名を聞くと「底筒男・中筒男・上筒男」と答える

- ⑥ その神は神功皇后のお腹に宿っている子が国を統治すると答える
- ⑦ 神功皇后はお腹に石を巻いて西（新羅）を征伐する
- ⑧ 神功皇后は九州に帰ってから出産した。その子が応神天皇である  
大筋では以上の流れである。

お腹に石を巻いたというのは出産を遅らせた事を意味しており、既に死んだ仲哀天皇の子では無い事を暗に語っている。

この様な事を記している理由は下記の2点を記したいが為であろう。

(1) 応神天皇は倭建命（大和王家）の血筋を受け継いでいる。

(2) 表向きは(1)だが、実際には違う父親がいることを暗示させておきたい。

「住吉大社神代記」によると神功皇后と住吉大神は「秘事」があり、夫婦の間柄となったとの記載がある。つまり、応神天皇の父親は住吉大神（底筒男・中筒男・上筒男）であるとしている。ではその住吉大神とは誰であろうか。

応神天皇が誕生する九州にて神功皇后と一緒にいたのは仲哀天皇以外には建内宿禰のみである。

つまり、応神天皇の父親は建内宿禰であり建内宿禰は住吉大神の流れを受け継ぐ人物と言う事になる。

## 8) 大国主神と倭建命について

### ① 同じようなエピソード

#### ・大国主命

須佐之男命は野原に射た矢を大国主命に探させ、その後にその野原を焼いた。大国主命が困っているところに鼠の告げた穴に隠れて難を逃れることができた。

#### ・倭建命

相模国の国造の偽りで強い神を退治に野の中へ入った時に、国造は野に火を放った。倭建命は草薙剣にて向かい火を起こして難を逃れた。

### ② 亡くなる場面では同じように猪と山が関係している。

#### ・大国主命

兄弟の神々の指図にて伯耆国の山の麓にて赤い猪を捕まえようとした。しかし、兄弟の神々は火で焼いた猪に似た大きな石を転がし、大国主命がその石を受け取って焼かれて死んだ。(母親の助けで蘇生している)

#### ・倭建命

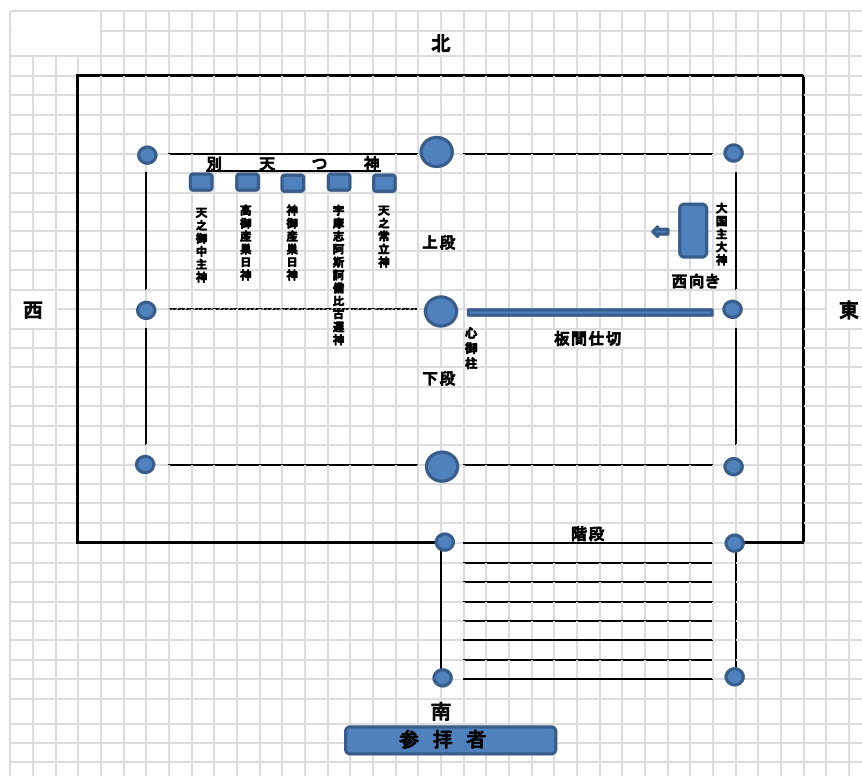
伊吹山の神を殺しに行ったとき、大きな白い猪に出会う。後で殺してやろうとして山に登ったが、雹が降って来て身体に当たり、これがもとで亡くなる。

(猪と山が関係して亡くなった人物はもう一人いる。香坂王（大山守命）については後述する)

### ③ 出雲大社（少し主題と離れる部分があるが了承願う）

出雲大社の主祭神について検証する。

下記は出雲大社本殿内部を示した図である。



主祭神とされる大国主命は西の方角を向いて参拝者に対して横を向いている。横を向いている事について色々な理由がいわれているが、主祭神が西向きを望むなら本殿も西向きにすれば良いことである。

上図の別天津神は、古事記にて最初に現れた五柱の神である。最初が天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神、次に宇摩志阿斯訶備比古遲神、最後に天之常立神の順に現れている。つまり、上図の西から順番なのである。

以上から分かるように北側及び西側が上座になっているのである。東側の下座で横を向いている大国主命が主祭神とは思えない。出雲大社は別天津神が主祭神なのである。

つまり、出雲大社は元々別天津神を主祭神として祀った神社であり、後に大国主命も祀られたことを意味する。とすると下記2点がわかる。

- ・ 出雲大社は大国主命が合祀を望む様な倭国唯一の神社であった。  
農繁期が終わった旧暦の神無月（現在の11月過ぎ）に全国の神々（王）が集まる神社だった。
- ・ 大国主命は、出雲大社に合祀されるに相応しい実績を残した。  
少名毗古那神と三輪山の神の助けで国造りを完成させた。

次に、古事記では倭建命の亡くなった時について、「河内国にもお墓を作ったが、倭建命の魂である白鳥は、その地からさらに飛びたって飛行された」と記載されている。白鳥は渡り鳥で冬に日本へ飛来する。

下記は、「ハクチョウ飛来地分布図（鳥見風来坊）」の引用図である。



上図の様に、出雲は白鳥が飛来する南限となっている。冬にしか飛来せず、当時の九州、瀬戸内、畿内の人からすると非常に珍しい鳥であったはずである。

又、古事記では垂仁天皇の皇子は、もの言わぬ皇子であったが白鳥をみて何か話をはじめ、お告げによって出雲の大神に参拝する事で言葉を話したとされている。当時は出雲と白鳥が結びついていてと思われる。

亡くなった倭建命の魂が白鳥となって飛行したとは、出雲大社に合祀されたことを現していると思われる。

大国主命（倭建命）は国造り（全国統一）の実績に因り別天津神が祭られている出雲大社への合祀が叶ったのだろう。

#### 9) 崇神天皇について

古事記には、崇神天皇の子であるヤマトヒコノミコトが「始めて陵墓に人の垣を立てた」と記してある。

日本書紀では、垂仁天皇（崇神天皇の子）が、叔父であるヤマトヒコノミコトの陵に近習の者を生きたままで埋めたが「古の風であるといっても、良くないことは従わなくてもよい」と言って殉死を止めたと記してある。

これは、第十代崇神天皇の時代の畿内での出来事である。

この陵墓の殉死に関する記載からは下記2通りの何れかと思われる。

- ① 畿内にて初めて陵墓で殉死を行った。陵墓での殉死は天皇家では古の風習であった。
  - ② 天皇家として初めて陵墓で殉死を行った。陵墓での殉死は畿内では古の風習であった。
- 上記のいずれにしても崇神天皇は新しく畿内へ王としてやってきた人物という事になる。すなわち「御肇国天皇（ハツクニシラススメラミコト）」なのである。

次に、ニギハヤヒについて「石切劔箭神社」の社史によれば下記2点の記載がある。

- ・「虚空（そら）にみつ日本（やまと）国」と賛じ、これが日本（やまと）の国号のはじまりである。
- ・稲作・織物をもたらした。

大国主命の時代に三輪山の神が「大和（やまと）を囲む緑の山・・・」と、既に畿内をヤマトと呼んでいる。

又、先の天若日子及びニニギノミコトは豊かな葦原中国を目指しての事から畿内には既に稲作が十分発達していたと思われる。

つまり、「石切劔箭神社」の社史によるニギハヤヒは、天若日子とそれ以前にもう一人畿内へ降臨したニギハヤヒの二人の人物を混同して記載されているのではなかろうか。

大国主命より以前に畿内に入りヤマトと命名し、稲作・織物をもたらした人物は須佐之男命以外に考えられない。古事記では追放された須佐之男命による「五穀の起源」の物語が語られており、須佐之男命が何等か五穀の起源に関係していることも示している。

須佐之男命は高天原を追放された後に出雲へ行きその後 天の磐船にて畿内へ降臨し畿内他をヤマトと命名し、五穀をもたらし、崇神天皇として御肇国天皇となったのだろう。

以上のように図2にて対比した人物は、同一人であると思われ「神話の天孫降臨まで」・「神話の天孫降臨～神武東征まで」・「第十代天皇～第15代天皇まで」は同じ事実を繰り返していると思われる。

## 2. 日本の始まり

はじめに示した図1の系統図に沿って日本の始まりについて私案を述べる。

### 1) 別天津神

BC2世紀頃 出雲に最初の神である天之御中主神が現れる。次に高御産巢日神（高木神）、次に神産巢日神、次に宇摩志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神。

以上の五柱の神によって日本の始まりが形成された。後に、この五柱の神を別天津神として出雲大社に祀った。

### 2) 夫婦の神

天之御中主神より8世代後からは夫婦として国の統治を始めた。

妻は宗教的なシンボルの役目を受け持ち、以後の日本の統治には欠かせない存在となる。そして、宗教的な女王として後のイザナミ、卑弥呼、斎王へと続いていく。

### 3) イザナキ・イザナミ

天之御中主神より12代後のAD1世紀にはイザナキ・イザナミの時代となった。

イザナキ・イザナミは既に出雲だけでなく琵琶湖以西の中国地方一帯（オノゴロ島）を治める王となっていた。

その後に周りの国々との連合を成し遂げ、やがて倭国全土を連合国家とした。

古事記によるとイザナギ・イザナミの国生み神話にて大八島の国を下記の順に国を生んでいる。



① 淡路島

② 四国

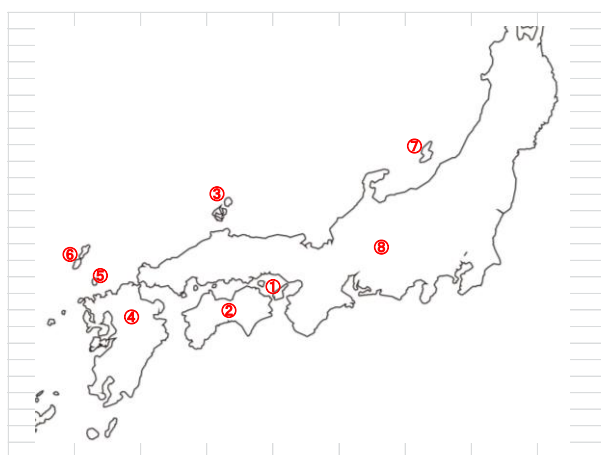
③ 隠岐

④ 九州

・

・

・



この国生みが連合国家を創る順序と思える。

自身のオノゴロ島に近い順に連合国家を形成するとなると、淡路島に接し、四国に接し、隠岐の島に接し、九州に接している場所、それは琵琶湖以西の中国地方であり、ここがオノゴロ島と思える。

因みに、日本書紀には、「一書に」との記述で数パターンの順番を紹介しているが、その全てにて本州を1番目か2番目に記載している。日本書紀の編者は当然ながら古事記の内容も調べているはずなのに何故か古事記の順番は「一書に」として記載がない。恐らくは本州を最後にすることに抵抗があり、作為をもって編纂したものと思える。それに対して古事記は、作為なく元の資料をそのまま編纂したと思える。

このようにして、全国の王が神無月に出雲大社へ集まる連合国家が誕生した。そして、当時の中国である後漢に使者をおくり、遂に「漢委奴国王」の印綬を受けた。

即ち、琵琶湖以西の中国地方はオノゴロ島であり、さらに中国からは奴国と呼ばれた国であった。

#### 4) イザナミの死と新たな奴国誕生

イザナミの死によって大きな変化が生まれる。

代々 宗教的女王を妻とする事で王は選ばれてきた。よって、イザナミの死はイザナキの王権も譲渡することとなる。

ところが、イザナキはそれを拒否し王権の座に居続けようとしたために出雲を追われることとなる。(黄泉の国からの逃避)

イザナキは、王である証として「漢委奴国王」の金印を出雲から持ち出して九州筑紫に逃れた。そして、この金印の奴国王であるが為に筑紫に新たな奴国を作り上げた。魏志倭人伝に2つの奴国が存在するのは、この新たな奴国とオノゴロ島の奴国である。イザナキは出雲から連れてきた神（身に着けた物から生まれた神）以外に筑紫にて新たな神も得る。

新たなイザナキの奴国を中心とした北部九州と、出雲を中心とした連合国との時代がAD1世紀から3世紀まで続くことになる。

イザナキの九州の奴国は、綿津見神と筒之男命の二柱の神が統治し「底綿津見神・底筒之男命の時代」～「中綿津見神・中筒之男命の時代」～「上綿津見神・上筒之男命の時代」へと続いていく。

#### 5) 天照大御神と須佐之男命

3世紀となり、北部九州は「ヤマト」と呼ばれ、南部九州は「ハヤト」と呼ばれていた。「ヤマト」では出雲での風習に従って「ヒメ」と呼ばれる宗教的な独身女王が各国の同意にて共立された。この「ヤマト」の女王が都とする女王国は宇佐神宮辺りにあり、その「ヒメ」が魏志倭人伝に登場する卑弥呼である。

中国では後漢が滅亡し三国志の時代となっていた。「漢委奴国王」の効力を失った「ヤマト」の「ヒメ」は、後漢の流れを汲む魏より「親魏倭王」という新たな称号を得ることができた。

その「ヒメ」が古事記の天照大御神（初代天照大御神）である。又、須佐之男命は綿津見神の末裔であり海の支配権を任せられていた。

須佐之男命は、倭国全土から王が集まった出雲へ行き「親魏倭王」を認めてもらえる様に提案するが天照大御神からは拒否される。

その後、天照大御神は没し（天の岩屋戸）、須佐之男命は出雲へ向かい、神無月に出雲に集まった八ヶ国の王に「親魏倭王」を認めさせる事に成功する。（八俣の大蛇）

そして、須佐之男命は天磐船に乗り畿内に降臨し、八ヶ国を新たな「ヤマト」と命名した。又、綿津見神の須佐之男命が王となった八ヶ国は、綿津見の国とも呼ばれた。魏志倭人伝には卑弥呼の墓に殉葬者の奴隷が百余人とされている。即ち、須佐之男命は殉死の風習のある九州から殉死の風習の無い畿内で御肇国天皇（崇神天皇）となったのである。

#### 6) 豊鍬入姫命

九州では天照大御神が亡くなって「ヒメ」が空位の状況であった。そこで崇神天皇は、畿内で三輪山の神に仕えるオオタタネコを遣わした。しかし、「ヒメ」は未婚の女性との決まり事により九州からは拒否される。やむなく崇神天皇の皇女である僅か十三歳の豊鍬入姫命（台与）を送る事となる（天の岩屋戸）。崇神天皇は未だ幼い娘の為に神宝を授けた。それは、天叢雲劔（畿内の神宝）、八坂瓊勾玉（出雲の神宝）、八咫鏡であり、須佐之男命が天の安河にて誓約にて生まれた三種の神器である。この三種の神器は宗像

氏が三か所に保管することとなる。こうして豊鍬入姫命は2代目天照大御神となった。そして、数十年後に豊鍬入姫命は亡くなり、故郷の畿内に葬られた。

#### 7) 倭比売と倭建命

豊鍬入姫命が亡くなった後（4世紀初め）、次の「ヒメ」として崇神天皇の孫娘である倭比売が九州に赴き3代目の天照大御神となった。

畿内では崇神天皇の曾孫である倭建命が、少名毗古那神の手助けにより勢力を伸ばしていた。南九州（ハヤト）を征服し、東国も征服し、そして、聖地の出雲も組み入れ、遂に倭国全土を統一した。

尚、少名毗古那神は別天津神の高御産巢日神（高木神）と神産巢日神の子孫である。

そして、古事記の天孫降臨や神武東征にて度々登場してくる高木神は、この少名毗古那神の事を指している。

#### 8) 山幸彦と豊玉毗売そして玉依毗売

イザナギから続く筒之男命（住吉大神）の子孫（山幸彦）は、九州にて引き続き地位を保っていた。そこへ3代目天照大御神として倭比売が赴いてきた。即ち、綿津見の国から豊玉毗売が九州にやってきたのである。

ここで重大事が起きてしまった。生涯独身であるべき「ヒメ」の豊玉毗売と山幸彦の間に子ができたのである。倭国を統一し実権を握っていた倭建命（大国主命）の命により下記となった。

- ・倭比売（豊玉毗売）：自ら女陰に箸を突き死去
- ・山幸彦：瀬戸内海の大三島に幽閉（竜宮城神話）

倭比売の悲劇は国中に衝撃を与えたものと思える。やがて、倭比売は崇拜の対象となり畿内に大きな墓（箸墓古墳）を作って葬られた（豊玉毗売は、鮫の姿をみられ坂を塞いで綿津見の国に帰った）。山幸彦は、母のコノハナサクヤヒメが大山積神の娘であることから大三島に大山積神社として祀られた。

豊玉毗売が亡くなった後に次の「ヒメ」として、綿津見の国から玉依毗売が九州に赴いてきた。そして、倭比売と山幸彦の間にできた子（天津日高日子波限建鵜草葺不合命）も九州にて生きていた。

#### 9) 神功皇后と建内宿禰

神功皇后と建内宿禰は、図2の様に下記 対比している。

- ・神功皇后：万幡豊秋津師比売命（少名毗古那神の娘）、玉依毗売
- ・建内宿禰：天忍穗耳命、天津日高日子波限建鵜草葺不合命

九州に宗教的女王として赴いた神功皇后と建内宿禰の間に子（ニニギノミコト、神武天皇、応神天皇）ができた。生涯未婚であるべき神功皇后に子が産まれた事に対して、建内宿禰は父（山幸彦）と母（豊玉毗売）の悲劇が頭に浮かんだことだろう。そして、建内宿禰は生まれた子も含め一族を連れて畿内の勢力には手の届かない日向の高千穂の峰に逃れた（天孫降臨）。

#### 10) 神武東征、応神東征

その後、南九州に逃れていた建内宿禰は、少名毗古那神（高木神）の手助けにて畿内へ行くことが許された。

先ず、先遣隊として息子を畿内（葦原中国）に送った。

- ・天菩比（3年経っても復命しない）
- ・天若日子（8年復命せず、亡くなる）

最後に神武天皇（応神天皇）を連れて自らも畿内へと向かう。これは決して大がかりな軍隊での侵攻ではなく、小規模な一行が様子を伺いながら畿内へ向かう旅である。

#### 11) 桃太郎と気比神宮

桃太郎の話は神武東征の出来事が、おとぎ話になったものであろう。

このおとぎ話は下記の比喩と思われる。

桃太郎：神武天皇、応神天皇

川：瀬戸内海

猿・雉・犬：申年・酉年・戌年

キビダンゴ：吉備地方の手助け

鬼が島：畿内の王都

畿内にて勝利した後に応神天皇は敦賀の気比大神と名前を交換したとなっている。

この意味するところは、応神天皇は母である神功皇后の故郷である敦賀（神功皇后は敦賀から九州に赴いている）の王に納まった事を示していると思われる。

気比神宮の桁梁には、桃太郎の彫刻像があったとのことである。（空襲にて焼失）

#### 12) 忍熊王

応神天皇はその血筋や宝物によって畿内にて認められた事だろう。しかし、畿内には王位継承者として忍熊王（阿遲志貴高日子根神、建御名方神、ナガスネヒコ）がいる。畿内で王位継承は忍熊王となり、応神天皇は敦賀の王となったと思われる。

古事記には、応神天皇が王位継承しその後に応神天皇の子である大雀命（忍熊王）が王位継承した様に記録した。

古事記などに下記が記されている。

- ・阿遲志貴高日子根神と天若日子（建内宿禰の子）は、瓜二つであった。
- ・大雀命（後の仁徳天皇）は建内宿禰の子と同じ日に生まれた。

以上のことから忍熊王（崇神天皇及び倭建命の血筋である）が王位を受け継ぎ、さらに形の上では建内宿禰（崇拝の対象である倭比売の子）の子となった。

#### 13) 継体天皇

記紀では、25代武烈天皇が後嗣を残さなかった為に越前国から応神天皇の5世孫である継体天皇が推戴されたとされている。いくら後嗣がいなかったとしても5世も遡らなくてはならないほど後嗣が無かったとは考えづらい。又、傍系の5世代孫が皇統を維持することは困難ではなかろうか。

継体天皇は応神天皇の血筋を守って皇統を維持していた越前国の王であったのだろ。  
そして、建内宿禰の子孫は、自分たちの始祖である建内宿禰の血筋を受け継ぐ継体天皇を擁立したことにより、蘇った一族として蘇我を名乗ったと思われる。  
そして、始馭天下之天皇（はつくにしらすすめらみこと）を自らの血筋とする為に、  
応神天皇から継体天皇までの越前国での記録は、自らの歴史書に初代神武天皇から10代崇神天皇までとして記録したのだらう。

## おわりに

### 1) 宇佐神宮

大分県宇佐市にある宇佐神宮は、宇佐八幡宮神託事件で示されたように伊勢神宮を凌ぐ程の皇室の宗廟である。

主祭神は、八幡大神（応神天皇）、比売大神（宗像三女神）、神功皇后であるが、中央に鎮座する比売大神が主神であろう。比売大神は宗像三女神と言われているが恐らくは下記「ヒメ」の三女神であろう。

- ・初代 天照大御神（北部九州のヤマトにて共立されたヒメ。魏志倭人伝の卑弥呼）
- ・二代 天照大御神（崇神天皇の娘 豊鍬入姫命。伊勢神宮外宮。魏志倭人伝の台与）
- ・三代 天照大御神（崇神天皇の孫娘 倭比売。伊勢神宮内宮。日本書紀の百襲媛命）

### 2) 古事記

乙巳の変は、中大兄皇子が蘇我入鹿を宮中にて殺害した事件であり、クーデターとも言われている。

クーデターとは非合法的な武力にて権力を手に入れる事である。

宮中において天皇他の大勢の前で大臣を殺害したにも関わらず拘束もされない人物に権力が無いと言えるだろうか。

中大兄皇子（母の皇極天皇も含めて）は、蘇我入鹿の殺害（蘇我本宗家滅亡）が何故必要だったのだろうか。自らの権力にて蘇我一族を政権から排除すれば済む事のように思われる。

天皇家は表面上においては権力を持っているが、蘇我本宗家に対して逆らえない何かがあった様に思われる。

乙巳の変にて蘇我蝦夷は攻めてくる中大兄皇子に対して対峙する事も無く自害した。その際に自らの館に火をつけて、蘇我家が保有していた国記と天皇記を焼失させている（国記の一部は救いだされたい）。蘇我蝦夷は、将来に禍根を残さない様にすべての権力を焼き払ったかのように思える。

次の表は古事記と日本書紀を比較したものである。

	完成年	登場する最後の天皇	登場する最後の天皇から完成までの天皇	推察
古事記	712年	33代 推古天皇 ~628年	34代 舒明天皇 ~641年 35代 皇極天皇 ~645年 36代 孝徳天皇 ~654年 37代 斉明天皇 ~661年 38代 天智天皇 ~671年 39代 弘文天皇 ~672年 40代 天武天皇 ~686年 41代 持統天皇 ~697年 42代 文武天皇 ~707年	日本書紀は完成直前の持統天皇までの記載となっている。それに対して、古事記は完成の80年前の推古天皇までとなっている。古事記の元となる資料に推古天皇までしか記載が無かった故と思われる。古事記の元となる資料を作成した人物(組織)は推古天皇崩御以降(推古天皇崩御の628年+αから舒明天皇崩御の641年+αまでの間)に資料作成できなくなる様な出来事があったと思われる。
日本書紀	720年	41代 持統天皇 ~697年	42代 文武天皇 ~707年 43代 元明天皇 ~715年	

蘇我氏は古事記の元になる資料(国記+天皇記+?)を代々受け継いで作成していたが、この資料の大半は乙巳の変(645年)にて焼失してしまった。

焼失した資料は、それを誦習していた稗田阿礼によって乙巳の変の直後に復元され、その復元された資料を元に古事記は編纂されたと思われる。